



No.30
2023・5

ホーモイ通信

高齢社会をよくする下関女性の会
(ホーモイ)

代表 田中 隆子
TEL/FAX 083-253-4892

URL: <http://www.yg-lifenet/homoj/>

地域の持続可能性に貢献する農業 安心安全な地産地消を目指すために

私たち人類は、これまで一方的に進めてきた「便利で重宝な科学技術偏重の流れ」に乗ってきたことが、いかに「地球環境を破壊しているか」を知ることです。それを見直し、「様々な生き物を養い育ててきてくれた自然はもとより、周囲の多様な存在との対話を始めなくてはならない」のではないのでしょうか。「自然に帰る生活」(循環型社会)を取り戻さなくてはならないと考えます。

行政・農協・コープやまぐち・秋川牧園の現状を学びました。
下関の農業(第1次産業)を立て直すために私たちにできることを考える。

ロシア・ウクライナの紛争で「フードショック」が起きている。特に自給率 39%の日本において、物価が急激に上がり市民の生活を脅かしている。
経済学者のアタリ氏によると「食糧危機の入口だ」と述べ、異常気象、国家における食料安全保障、自給拡大、食料を「健康社会」の礎、農業を魅力的に等話された。このままいくとお金を出しても買えない時代が来る。「治にあつて乱を忘れず」を忘れ、力を蓄えず備えを怠り右往左往する時が来る。

問題点

①食糧危機をどう乗り越えるか

- ・安心安全地産地消を推進
- ・食糧自給率を上げる
- ・国内生産者を守る
- ・自給率の高いコメの需要を拡げる、例えば知恵を絞ってトウモロコシを米粉、飼料米で代用する
- ・国産小麦(大山小麦)を復活させる
- ・コメの使い方を工夫する
- ・生活スタイルを考え直す
- ・工夫して農業産業を拡げる
- ・生産量を制限しない(作れるだけ作る…備蓄する)
- ・働き手不足は農福連携
- ・家産家消・フードロス・ローリングストック(日常備蓄)

②地域における食料安全保障・地域で支える食料安全保障

- ・食を支え合いながら生産者と消費者が循環していくシステムを創る
- ・参加型農業…半農半X・家庭菜園

問題点を乗り越える手段

①まず秋川牧園の力を借りる

②農業に関係している方々の力を借りる

行政・農協・市会議員・コープやまぐち・秋川牧園の方・大学教員等

③プロジェクトチームを結成する。

- ・安心安全な農業…循環型農業
- ・まず学校給食が賄える循環型農業
- ・生産者と消費者の顔が見える関係を作る
- ・農福連携・リタイヤした方々の労働・半農半Xの方々等々

困難な問題がいっぱいですが、官民一体で早急に頑張らなくてはいけない問題です。市民の命がかかっています。下関独自で取り組みましょう。

下関市の農業生産 平成17年の市町村合併で

716・17 km²

耕地面積・・・7,360ha

農業経営体数・・・2,645 経営体

農業算出額(推計)・・・115,1 億円

出典(2021年) 農林水産省

「わがマチわがムラ」市町村の姿

農業の現状と課題・消費者に求めること

下関市農林水産振興部 理事 中野 貴広 氏

(1) 下関市の農業生産の概略

平成 17 年市町村合併で大きな市になり面積は 716 km²になった。農地の面積は 7,380ha で米や野菜・果物をつくっている。農業に携わる人は 2,645 人となっている。農業生産額は 115 億円で、これが農業に関する数字です。一市 4 町それぞれがいろいろな農業の特徴を持ちながら、米も野菜も、果樹・畜産・花も生産は県内でほぼ上位に達しており県内でトップクラスの市です。

(2) 各地域の特徴（データは平成 18 年の数値）

- * 菊川…麦と大豆、プロイラー（肉用鶏）の割合が大きいのが特徴で平地が多くあまり広くはない。区画整理をして大きな農業がしやすい。
- * 旧下関…野菜・花の生産割合が多い。農家一人一人が持っている農地面積が大きくないので作る作物として面積当たりの生産性の高い野菜・花などにシフトしてきた。また市場が近いこともあり換金性の高い品目を作ることができた地域です。
- * 豊田…大豆・梨が盛んな地域です。寒い地域で山側なので米の生産量が多い。
- * 豊北…畜産が盛んな地域で、梨は国営農地開発で 山を開いて生産している。涼しい山の上の方で 200 頭規模の

酪農家がいる。またニワトリの採卵鶏の農家が何軒かある。

* 豊浦…農業生産の割合が少ない。以前は玉ねぎやミカンなどの産地だったが今は減っている。

下関市の農業産出額は 115 億円で、産出品目の割合は野菜 29%、米 20%、鶏卵 15%、乳用牛 9%、果樹 8%、その他が 19%です。

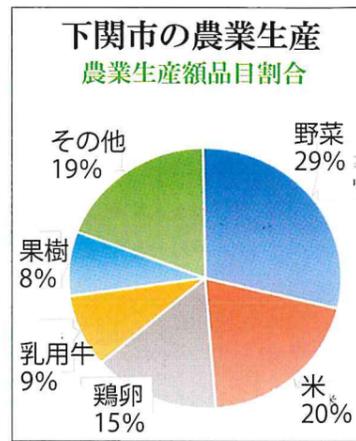
(3) 下関市の農業の課題

- * 農家の減少（農業者の高齢化）
- * 産地の減少（耕作放棄地）
- * 鳥獣被害（被害額は 1 億 5000 万円）

(4) 感想

下関市の農業は担い手の力、技術の力、消費の力が元気になる基です。それを導くのが振興部の仕事ではないかと思えます。「みどりの食料システム戦略」は下関ではほぼ進んでいないし推進もできていない。「みどりの食料システム戦略」を進めてほしい等のアンケート結果に応じてほしいもの

前田 祐子



農業協同組合の現状と課題・消費者に求めること

山口県農業協同組合 下関統括本部営農経済部部長 藤 永 清 一 氏

「地域農業と地域社会に貢献するJA下関」をキャッチフレーズに地域農業従事者と地域住民の食の安全安心を守る。

(1) 農協取扱販売高の推移

農家から出荷された米の販売を委託（完全委託方式・全量買い取り方式）されている。

下関の農産物は米が中心であるが、麦・大豆・野菜・果物・花き・畜産・そうめんなどがある。旧下関農協が合併した平成 6 年に比べ生産が半減し、食料自給率が低下した原因は、米の生産が落ち込んでいる事と、国の政策で生産調整を長く実施・米価の問題・鳥獣被害・生産意欲減・労働環境・食生活の欧米化等々である。

(2) 令和 3 年下関ブランド品目生産状況

下関には県内 1 の生産を誇るイチゴ・垢田のトマト・吉田ナス・アスパラガス・小ネギ・みかん・豊田梨・牛肉などブランド品を作り出す高い栽培術があるが、輸入飼料などが値上がりしており、農家は大変苦しい。

(3) 農協で行っている SDGs

「食と農を基準とした地域に根差した協同組合として組合員の声に応えながら、普段の自己改革への取り組みを通じて持続可能な地域農業・地域社会づくりに取り組んできました。今後はさらに私たちの事業や活動が与える多面的な影響にも配慮しながら、地球的視野に立ち地域社会を構成する一

員として組織・事業・経営の革新をはかり、社会的役割を誠実に果たします。農協グループは各々の置かれた環境を踏まえて SDGs の達成に向けてとりにくんでいきます。」とあり、具体的には ①産業廃棄物・余った農産物の回収 ②稲藁堆肥交換による耕畜連携・WCS ③合鴨栽培米（コープとんぼ米）④緑肥を活用した栽培等々。農協女性部が「3ない運動（すてない・のこさない・もらわない）」をやっている。

(4) 有機農業について

- ◎有機 JAS 規格の有機野菜
 - ①肥料や農薬の使用禁止・遺伝子組み換え野菜でない
 - ②有機野菜イコール完全無農薬ではない
- ◎日本で有機野菜が浸透しにくい理由
 - ①手間がかかる・生産効率が悪い
 - ②形にバラつき・色ムラ
- ◎有機野菜の弱点
 - ①見た目が整っていない
 - ②流通が少なく販売場所が限られる
 - ③有機野菜を作る農家が少ない
 - ④販売価格も高めに設定
- ◎農業経営による農業振興策
 - ①農業経営は個人経営から法人経営への割合が増加
 - ②農協の役割は担い手の機能と人材育成と耕作放棄地の再生であり「最後の担い手」から「最後の守り手」となる。

※下関市の全体像と共に、農家の抱える問題や食料自給率がなぜこれほど低下しているのか生産者の立場からさまざまな問題を分かり易く話され、消費者としてもっと農業に関心を持って生産者と近くなる必要性を感じた。

松原 玲子

小売業など流通業の現状と課題

消費者に求めること

コープやまぐち 常任理事 太田 高志 氏
福浪 美紀 氏

①コープやまぐちの理念

「地域、環境、社会、人々」の 4 つの視点で「エシカル消費」を進めている。「一人ひとりの願いを寄せ合い、私たちのまちに人間らしい豊かなくらしの創造を」を掲げ、暮らし、健康、福祉、文化、環境、平和の 6 つのテーマで、山口県を中心に学習会をしてきた。コープやまぐちは来年で 60 周年になる。

②コープがおこなう SDGs を目指すための活動と課題

商品を通して地域や環境、生産者を応援する仕組みを作っている。「大地の力を活かすシリーズ」「リサイクル材使用シリーズ」「海の資源を守るシリーズ」「森の資源を守るシリーズ」は環境問題とあわせて、色々な支援や応援を商品を通してやろうとしている。こうしたエコラベルが商品についてもそのラベルが何を意味しているのかが分からないから判断も出来ない。なぜこの商品が良いのか、背景も含めキチンと伝えていかなければならない。又、今消費者がどの様な事を求めているのか、その声をどう事業に生かしていくかを考え、地域との関係作りの為の買い物支援や夕食宅配サービスを行っている。更にココファームを立ち上げ、自分達で生産を開始し消費先迄を作る取り組みを行っている。

循環型・秋川牧園の取り組み

秋川牧園 代表取締役社長 秋川 正 氏

1. 秋川牧園の紹介

父が、昭和 30 年代に「1 個の卵から健康で安全なものをつくる」として山口市仁保で創業した。秋川家の原点は祖父の「口に入るものは間違っはいけない」という言葉である。この言葉は、食を扱う自分たちへの戒めの言葉だと思う。

2. 若鶏の無投薬飼育

秋川牧園の鶏の飼育の特徴は無投薬で飼うことである。今の方法は、鶏を鶏舎から出した後に鶏糞を四つか五つかの山にして発酵させる。発酵で発する熱は 70 度にもなり、その熱でブドウ球菌やサルモネラ菌などの悪玉菌が死ぬ。良い菌を増やすために熱に強い善玉菌といわれる納豆菌や乳酸菌を加えることでその菌が増えていく。よい菌がいるから鶏が病気になりにくい。

3. 地球循環！ 飼料米プロジェクト

食料需給率が 39% の原因は、餌の原料を輸入していることにある。日本のコメの消費は 1% ずつ減って、水田が余っている。これを活用してコメを飼料原料として水田を守るという考え方だ。農家とチームを組んでやっている。飼料米の良さは鶏糞を循環させていくことだ。

4. 化学物質の海

化学合成の最初は 200 年前の尿素であり現在は 10 万種類以上の化学物質が開発されている。地球や生命の歴史に比べあ

【消費者にできる事】

消費者は日々色々な課題があるが、環境、価格の問題、暮らしの中から関心を持ち賢く商品を選択できる力をつける為に学ぶ事が大事だと思っている。

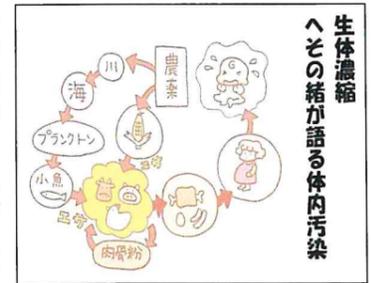
コープやまぐちとしては、商品を選ぶ事により SDGs に繋げる消費者参加型のエシカルチャレンジを行った。エシカルマークが付いた商品の購入は「誰かの笑顔につながる買い物」であり消費に価値を見出し、選択の意識を持って、これを買う事で誰かが笑顔になれるという消費を促している。

「コープやまぐちの産直三原則」とは、産地、生産者が明確、肥育肥培管理が明確、生産者との交流が行われている事を産地直結、産直としている。更に「地産知食」という食べ物を知る、生産者を知る、食べ方を知るという考え方の下に、地元の原材料を使った商品の紹介もしている。SDGs は一人一人が持続的に取り組む事が大事で、誰かがしてくれるのではなく自分たちでこの地球を作っていくのが SDGs の目標ではないかと思う。

終わりに、生協の会員だけではなく、日本全体が安心安全な物を食べていく仕組みはできないだろうかとの質問に、漁協や農家との連携と規格外品の活用、後継者問題をも考慮した販路の確保と拡大を検討している。休耕地の活用と自給率を上げる取り組みについては学校給食への安心安全な食材の提供の実現を目指しているとの回答があった。消費者も一人でも始められる事から行動を起こしていく事の大切さを実感した講演だった。

高尾 京子

まりにも急速な広がりである。人が勝手に作った農薬などは分解しないで蓄積するタイプもある。お母さんのへその緒の分析でいろいろな化学物質が検出された。胎児に化学物質が入り込んでいることになる。それがいろいろ悪さをして



5. サステナブル(持続可能性)を考える

持続可能性の 4 つの要素は、①未来への責任 ②共に生きる ③循環 ④活力だと思おう。

6. サステナブルに向けての秋川牧園の課題

飼料やエネルギーの自給、化学物質への依存度を減らす、地域の農業を元気にする、有機農業を広げる、消費者の参加や協力が挙げられる。

7. 消費者としてどう行動すべきか

- ①毎日の食を大切に
- ②消費することで応援する
- ③食べ方をちょっと見直す

受講しての感想 今だけ、自分だけと合理化を追求した生活が地球破壊につながっていたこと、また人間の体づくりに大切な食について本質的な安全性を見失っていたことを思い知らされた。今、この瞬間から自分の行動変容が求められるのだと痛感した。

岡田 久子

アンケート結果から

下関市農林水産振興部に対して

下関の農業の危機・深刻さを市民に知ってもらいたい。
下関市の行政として課題をどう解決しようとしているかが見えない。
消費者には、教育が必要（異常気象・地球生物の激減・人間の異常な病気の多発など）意識改革・生産者との連携・協力などを具体的に進める
政策が必要ではないか、熟考してほしい。

山口県

農業協同組合に対して

下関の農産物の品種や生産高、
販売量等についてはよくわかった。
有機農法・有機野菜の販売や
学校給食の対応について見えてきた
課題に対し生産農家がメリットを感じ
られるような取り組みとシステムの構築が
JAグループの社会的役割なのでは
ないかと感じた。

コープやまぐちに対して

ハード面・ソフト面で持続
可能な事業を続けている。
コープやまぐちの取り組みがよくわかった
組合員のみでなく広く市民に広げ
ていくことが大幸だと思った
市民の意識をあげるために
地産地食（食べるを知る・
生産を知る・食べ方を知る）
を広げたい！！

秋川牧園について

秋川牧園の持続可能な地域循環型
農業がよくわかった。下関の地域の問題は何
秋川牧園パート2ができればいいなと思う。
生産現場の活力・情熱が一番大事
だと思う。経営者の理念や
エネルギーがすごい
と思う。

消費者の視点で
来年もこの農業シーズ
やってほしいです。

山口市が秋川牧園と食料・農業・農村振興に
関する連携協定を締結しています。
少子高齢化で人口減少が著しい下関市こそ、
秋川牧園をモデルに持続可能な暮らし作りの
振興政策として取り組むことを要望します。

